「ユネスコ加盟 70 年の歴史をたどる」

本コラムは 2021 年の日本のユネスコ加盟 70 年を記念して、当時の文部科学省大臣官房文部科学戦略官である町田氏が個人的な見解を記したものです。内容は 2021 年執筆当時のものであり、また、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会をはじめ、日本政府の公式な立場を示すものではありません。

第 1 回：プロローグ

（文責／町田 大輔）

今年は、日本のユネスコ加盟 70 周年に当たります。これから不定期に（目標は一月に 2 回）、70 年の歴史の中で記憶されるべき出来事を交えながら、ユネスコと日本の関わりについて御紹介したいと思います。

私は、1998 年（平成 10 年）3 月から 2001 年（平成 13 年）1 月にかけて、日本政府のユネスコ常駐代表部（当時は組織上は在仏大使館の一部署）で書記官として働いており、それから 20 年ぶりにまたユネスコの仕事に関わることになりました。この 20 年で変わったところもあれば、変わっていないところもあるように思います。ユネスコ創設および日本の加盟以来の様々な出来事を追っていくことで、ユネスコの本質が見えてくるのではないかというのがこの寄稿の狙いです。私とユネスコとの関わりは公のものですが、ここでの記述には私の個人的な感想が含まれており、政府の見解ではないことを最初に申し上げておきます。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ユネスコは、日本が先の大戦で敗戦した後に初めて加盟した国際機関であり、当時青年だった世代の方々にはなじみが深い機関だと思われます。私がこう思うのは、プリンストン大学留学経験者による行天豊雄先生（旧大蔵省を退官後、プリンストン大学でしばらく教えていた）を囲む会に若い頃参加し、「今文部省の国際学術課という部署で働いています」と申し上げたところ、「ユネスコとかに関わっているの？」と聞かれ、この世代の人にはユネスコはそんなになじみ深いものだったのかと驚いたことがあったからです。

かくいう私も、小学生の時には、埼玉県所沢市にある西武園の西端にあった「ユネスコ村」に遠足に行った記憶があります。学校行事として行ったものなので、小学校教育の中でもユネスコが取り扱われていたことになります。ユネスコ村には、当時のユネスコ加盟国 60 か国のモデルハウスが建っていたのですが、なにぶん子供の頃のことなので、それ以上の記憶はありません。今の Google Map を見ると、「ユネスコ村駅跡」と書いてあるだけです。

一方、私が旧文部省で初めてユネスコと関わった頃の日本の若い人たちの間では、ユネスコはほとんど知られていなかったと思います。「名前は聞いたことがある」という程度で、たいていはユニセフと混同していました。ユニセフは募金活動を熱心にやっていましたし、年末になるとユニセフの Greeting Card を買う人がたくさんいて、よく知られていました。

今では「世界遺産」を通じて多くの日本人がユネスコの名を知っています。私たちにもなじみのある文化遺産・自然遺産が「世界遺産」リストに多く登録されているからです。しかしユネスコの事業はほかにもたくさんあります。日本が世界遺産条約に加盟（批准）したのは、1992 年（平成 4 年）です。ユネスコに加盟した 1951 年（昭和 26 年）からの 40 年間にも様々な形で日本は関わっています。これは私自身も経験していない時代のことなので、古い本や資料を読んで知ったことですが、次回は日本がユネスコに加盟する前の出来事を追ってみたいと思います。

町田 大輔

1986 年（昭和 61 年）、文部省（現文部科学省）に入省。文部科学省・文化庁内の各部局のほか、他省庁、地方、独立行政法人、大学、研究所で様々な業務に携わったが、科学と国際分野の経験が比較的長い。1996～2002 年、旧文部省国際学術課課長補佐、在仏日本大使館（ユネスコ代表部）一等書記官、文化庁国際文化交流室長、文部科学戦略官としてユネスコに関わった。2023 年 3 月より、独立行政法人 国立文化財機構 アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）所長。

ユネスコ未来共創プラットフォームポータルサイトより
全 20 回の寄稿文をお読みになれます ➡